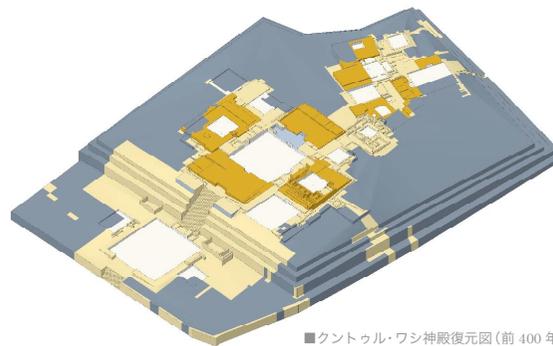




■修復されたクントウル・ワシ遺跡

■十四人面金冠（前 800 年頃） ■鳥を象った土器（前 800 年頃）



■クントウル・ワシ神殿復元図（前 400 年頃）

Kuntur Wasi

En busca del origen de la civilización andina

クントウル・ワシ遺跡へようこそ

ペルー北部・古代アンデス文明の遺跡から人類の文明の成り立ちを探る

■加藤研究室 ■井口研究室 ■文化人類学 ■2007.4. ■

みなさん、クントウル・ワシ遺跡という名前をご存知ですか？

初めてこの名前を耳にした人もいるでしょう。クントウル・ワシとは、ペルーの北部、アンデス山脈の西側のカハマルカ県という山地の、小高い丘の上にある神殿遺跡です。標高 2300mにあるこの遺跡を、1988 年から加藤泰健先生・井口欣也先生をはじめ、ペルー人研究者を含む調査チームが、その後 10 年あまりにわたって発掘調査を行ってきました。

みなさんはペルーの遺跡と聞くと、真先に世界遺産のマチュピチュで知られるインカ帝国を思い浮かべるでしょうが、実はインカは 15 世紀後半から 16 世紀前半という短期間に繁栄した社会にすぎません。ペルーではそれより何千年も前からそのインカ帝国に繋がる長い文明の歩みのなかで、さまざまな文化や社会の興亡があったのです。そのような古代アンデス文明の初期に光をあて、その基盤となった社会の原動力とプロセスを解明しようとするのが加藤先生の率いる調査チームの目的です。

世界の注目を浴びた金製品と、重なりあう神殿の、高度な古代文明。

クントウル・ワシ遺跡は、今からおよ

そ 3000 年前、紀元前 1000 年から前 500 年の間に利用された遺跡で、祭祀活動をおこなうために石造の神殿が建てられました。長年の発掘調査によって、この遺跡には時代の違う複数の神殿が重なり合っており、地中に埋まっていることがわかりました。最初につくられた神殿を壊してその上に新しい神殿を造ったり改修したりするなど、神殿の建築活動を通じて、当時の社会はまとまりやさまざまな技術、生産力を充実させてきたのです。神殿にはジャガー（南米に生息するヒョウのような動物）や蛇と人間を融合させた不思議なデザインの石の彫刻もあります。鉄の道具を使わなかったアンデス文明は、石を材料と道具に用いる高度な技術を発達させたのです。

「もの」を通して古代の人々の活動や社会、文明の個性を知る。

さらにクントウル・ワシからは、南北アメリカ大陸最古のみごとな金製装飾品が墓の装飾品として発見され、世界的な注目を集めました。当時の冶金技術の精巧さ、そしてその他の副葬品などから社会の階層化も読み取ることが出来ました。副葬品のなかにはエクアドル産であるウミギク貝の装飾品もあり、長距離交易の証拠となりました。発掘調査で得られる

資料は、古代の昔から現在にまで偶然に残った「もの」に過ぎないのですが、それらを組み合わせたりいろいろな方法で分析することによって、当時の人びとの実際の活動が見えてくるのです。

こうした地道な発掘を積み重ねて得られた調査の成果は、アンデス文明の具体的な発展のプロセスを明らかにするとともに、人類史のなかで世界各地に生まれた文明の多様性とさまざまな可能性を教えてください。古代文明といえば「四大文明」が有名ですが、アメリカ大陸にもアンデス文明やマヤ文明がありました。いまでも昔も人間の社会にはそれぞれに個性があり、決して優劣がつけられるものではありません。その個性を具体的なデータをもとに明らかにしていくのが文化人類学の重要な役割のひとつなのです。

住民と研究者が協同した、博物館建設による文化遺産の保全の試み。

クントウル・ワシ遺跡発掘調査のような外国での調査研究では、なにも昔の遺跡だけを相手にしていれば良いものではありません。クントウル・ワシはペルーという現代国家の貴重な文化遺産であり、

遺跡のある村の村人にとっても大事な村の誇りなのです。自分の国の歴史を解明したいペルー人考古学者もいます。これらの人びとの理解をえて、協力し合いながら調査を進めることが必要です。

クントウル・ワシでは黄金製品の発見をきっかけに、この遺跡に対する国や住人の関心はよりいっそう高まりました。住人の大きな希望もあり、地元の人に金製品をはじめとする貴重な発掘資料を展示するための博物館を建設することになりました。資金は日本外務省、在ペルー日系企業に調査チームが働きかけて集めました。また、日本でクントウル・ワシの展覧会を開催して一般の方から募金を募るなどして、1994 年にクントウル・ワシ博物館が開館しました。博物館の運営に地元住民があたり、住人自身が文化遺産の保護と展示にかかわるというひとつのモデルケースが実現したのです。

研究成果の住民への還元を通して、地域振興の実現へ。

さらにクントウル・ワシでは、ユネスコのプロジェクトによって、遺跡の主要な建築を修復し保存するという事業も行

われました。これによって、普段は土を被って見ることのできなかった昔の神殿が、今日の村に姿を現すことになったのです。遺跡を訪れた人は、実際に神殿の様子をみて、同時に説明のパネルと博物館で出土した資料を見学します。こうした調査チームの研究成果を、一般の人たちにわかりやすく見せることができるようになりました。さらに現在は周辺の道路なども整備されつつあり、より多くの人が遺跡を訪れるようになれば、観光ルートのなかのひとつとなり、地域振興に役立って期待も出てきます。

文化人類学のフィールドワークでは、遠い国へとでかけてデータを収集します。しかし、それは学問上の営みにとどまりません。

文化人類学者と現地の人びとや社会との間には、研究を超えたさまざまな関係が生まれるのです。

（文：平野京美 / 井口欣也）



■ジャガーの石彫（前 800 年頃） ■研究者と住民と協同で作った遺跡博物館

■Abri2007 ■ANTROPOLOGIA CULTURALE KATO-INOKUCHI ■